

「あじさい【紫陽花】」あぢさゐ

萩原 義雄

江戸時代の曲亭馬琴『増補俳諧歳時記葉草』〔夏之部あ〕に、

紫陽花

四葩花

「韻語陽秋」唐の招賢寺に山花あり。色紫、氣香しく、穠麗愛すべし。人、其名を知る者なし。白樂天、これを過て標をなす。其名を紫陽といふ。「和漢三才圖會」其莖叢生す。莖・葉、綉毬の葉に似て、五月花をひらく、云云。此花もまたてまりの花に似て、淡碧色。一名、四葩の花。「夫木」あぢさゐのはなのよひらはおとづれてなどいなめのめなさけばかりは 俊頼

とあつて、日本人が梅雨時に風情を感じる花の一つとして、和名「あぢさゐ」として今も親しまれている花がある。その語源は、大槻文彦編『大言海』にいう「集真藍（あずさあい）」ということばであり、「あづ」は「あつ」の語根で集まるの意、「さい」は「さあい」（真藍）からきたことばで、藍色の花がいくつも集まつて咲くと言う意味から、この花の形状と色彩とが複合化して一つの花の名称となったものである。異名としては、「よひらのはな【四葩花】」とも呼称され、実際には中国にも「八仙花」という名でこの花があつて、唐の白樂天（白居易）（七七二〜八四六）が「招賢寺」にて詠じた詩『白氏文集』の詩「紫陽花」所収に見えている。紫陽の花の語は、その後の中国文献資料からはなぜかしら見出すことができないという不思議な花でもある。

というのも、現在では庭園の草花として平地にも栽えられているが、もともとは山地に咲く花であつたのであろう。中国の詩人、そして作家及び作画者たちの目を奪う花の対象からも疎遠な花の一種であつた。この花が本邦にあつて細々ではあるが賞美されたのは、仏教崇拜に遵つて山こもりしてすこす都人が六月の梅雨時に可憐な色合いを見せ、うっとりしい雨雲の間隙をぬつて光り射しに映えるかのようにその色合いを七変化に見せていくこの花の美しさに目を奪われるようになったことに由来するからであらうと私は思うのである。実際、『万葉集』卷二十・⁴⁴⁴「安治佐為能 夜敵佐久其等久 夜都与尔乎 伊麻世和我勢故 美都々思努波牟 / 右一首左大臣寄味狭藍花詠也」の一首、平安期に六首、鎌倉期に十五首、室町期に五首ほどがあるのみにすぎない。それに付随する歌学書では、『八雲御抄』卷第三に、「阿知佐井 万に、やへくさと云り。歌〔に〕難詠物也」〔312頁〕と記載が見られる。

また、平安時代の古辞書源順編二十卷本『和名類聚抄』に、「紫陽花白氏文集律詩云紫陽花、和名安豆佐爲」〔勉誠社文庫887⑦〕とあり、かつ、院政時代の古辞書、観智院本『類聚名義抄』にも、「紫陽花、アツサ井」〔僧上五③〕「梗、音便、アツサ井」〔僧上五三④〕と記載され、同じく黒川本『色葉字類抄』に、「紫陽花、アツサ井。梗、同」〔下二二オ③〕と記載され、室町時代の広本（文明本）『節用集』に、「紫陽シヤウヤウ」〔草也〕〔草木門745⑤〕、『佚名分類辞書』花草に、「紫陽、アツキイ紫陽花也。今按此是繡毬花也。紫綉毬有紅綉毬」とある。江戸時代の『書字考節用集』村上平樂寺藏版には、「紫陽花アツサイ」〔白文集〕／「夫木集」線繡花〔485①〕とある。本邦古辞書にあつては、「紫陽花」として継承されている。そして、本草学からこの花を見たとき、花び

らは解熱剤に、葉は瘧病おこりに特効があるのみでなく、その堅い茎は木釘や楊枝の材となった。このことは古の寺院が担った医療実務には必須な薬草の一種であり、この観点からも、仏教社会とは密接な花(植物)の一つであったのではないかと見るのだからいかなるものであろうか。

馬琴は中世の歌人俊頼の『夫木和歌集』巻九所出の和歌「あぢさゐのはなおとづれてなぞいなめのなさけばかりは」の歌を引用する。江戸時代の俳人松雄芭蕉も「紫陽花や帷子時の薄浅黄」(陸奥衛)と詠む。また、江戸時代後期には、オランダ商館の医師として来日したシーボルト(オランダ人)が愛妾であった長崎丸山の遊女、楠本滝「お滝さん」を「オタクサ」と呼び、これを紫陽花の学名「Hydrangea Macrophylla var. otaksa」おたかとして出版したことで一気に世界へ広まったものである。

そういう私もこの紫陽花の好きな一人である。現在、おりしもこの時節に「母の日」という記念日があり、この日には通例「カーネーション」という花を贈る習慣が根付いている。だが、日持ちの良い「紫陽花」を「カーネーション」の代わりに母に贈る人もいる。故郷の庭に一苗一苗栽えつづけられ、やがて「紫陽花」の園がこの方の家に誕生する日もそう遠くは無かろうと思いをはせるとき、母と娘のまさに思いで深い花ともなろうというものだ。



現代では、「あじさい」は、各地の寺院にその花が植栽されていて、これを愛でることができ。「あじさい寺」などとも呼ばれ、多くの参拝者の目を和する花模様で親しまれている。

《補注》

※大槻文彦編『大言海』に、「あぢさゐ(名)【紫陽花】あぢさゐ集眞藍あぢさゐの約転(阿治の語原を見よ、眞青さあを、さをと^なる)」又、あづさゐ。灌木の名。高きは五六尺に至る、葉は、對生して、大きさ四五寸あり、長^{なが}楕たいにして、先き尖り、周辺に鋸葉あり、初夏に、茎の頭に、小さき花を開く、四弁にして、数十むらがり咲く、歌に、四枚の花と詠めり、色は、初め、黄白にして、後に、碧、或は、淡紫等に^{あぢさゐ}変ず、故に七変化の名あり。紫繡毬。万葉集、四57「味狭藍あぢさゐ」同、二十46「安治佐爲あぢさゐ」の、八重咲くごとく「六帖、六、草「あぢさゐの、花の四片よひちに、逢ひ見てしがな」倭名抄、二十16「白氏文集律詩云、紫陽花、安豆佐爲あづさゐ」名義抄「同、あづさゐ」「八〇④」と記載する。

※「紫陽花 白居易」の詩は、前書きに「招賢寺有山花一樹、無一人知名、色紫花香、花芳麗可愛、頗類仙物、因以紫陽花一名之」とし、

何年植向仙壇上 早晚移栽到梵家 雖在人間人不識 與君名作紫陽花

という。この「紫陽花」は紫色の花が咲く木犀であり、唐の李德裕が『平泉草木記』で「紫桂」とし、本邦には産しない樹木であるとした。源順がこの表記に「安豆佐爲」と認定したことが今日まで誤認され、継承され続けているのだが、この花の紫色は、邦人の目には一つの確かさとして伝えられてきたことも事実である。

※『名義抄』『色葉字類抄』のもう一つの表記字「莛」の字だが、新撰字鏡に、「莛、止毛久佐又安地佐井」(卷七⁴⁵³⑦)とし、大東急記念文庫蔵『字鏡集』卷第二に、「莛、音便ノアツサへ(卅五才①)」と記載が見えている。昌住がこの表記字を何により、「安地佐井」と収録したのが焦点となってきた。すなわち、「莛」の字については、『康熙字典』に、「莛集韻、毘連切音媿、類篇、莛縷草名」とあつて、これが何故この花の名となつたかは、編纂者昌住にしか解し得ていないことになる。そして、学僧の手になる古辞書からやがては公家・武家などの智者がその所以を検証することなく、文字表記として今日まで定着をみってきた表記漢字の一種となつてきている。この事柄については、漢学者の目は冷ややかであり、この文字表記に「あぢさゝる」「あぢさゝい」「あぢさゝる」「あぢさゝへ」などの和名は、一切収録をしないというのが鉄則した編纂方針のようである。

〔補説箇所〕

あじさいの語源

集真藍（あずさあい）

本物の藍で染めたような色の花が

たくさん集まって咲くことに由来する。

あじさいの学名

〈ハイドランゲア マクロフィラ オタクサ〉命名者は江戸時代後期に長崎出島のオランダ商館の医師として来日した「シーボルト（オランダ人）」である。

彼は日本人妻楠本滝「お滝さん」を「オタクサ」と呼びそのまま紫陽花の学名にした。

日本にしかなかった紫陽花の花は彼の出版した本で一気に世界へ広まった。

ゆきのした科

日本原産。ガクアジサイが母種

土壌が酸性の時Ⅱ青色の花が咲く

アルカリ性の時Ⅱ 紅色の花が咲く

紫陽花考（その1）

あじさいの語源（その1）

あじさいは、旧仮名遣いでは、あぢさゐと表記しました。したがって、発音はa-d-i-sa-iに近かったものと思われます。

牧野植物図鑑などによるとあぢさゐの語源は、「集真藍 = adu-sa-aw-i」で、本物の藍で染めたような色の花が沢山集まって咲くことに由来するとのこと。

あじさいは、日本固有の植物で、和名類聚抄にも「紫陽花Ⅱ安豆佐為」として採録されています。

紫陽花という漢字表記は、和名類聚抄によれば、白氏文集の七言律詩にあるようです。しかしながら、現在、私が確認できる中国植物図鑑や中日辞典の中には紫陽花の文字は見当たりません。したがって、紫陽花と表記しても、あくまでも日本固有のあじさいを意味することに変わりはありません。

なお、あぢさゐは、現在のガクアジサイをいい、現在の紫陽花は、ガクアジサイを原種とする園芸種とのことです。

紫陽花考（その2）

あじさいの語源（その2）：紫陽花という漢字表記について

紫陽花という漢字表記が文献上に表れるのは、和名抄（倭名類聚抄の略、源順著、10世紀前半）が最初と思われます。

あじさいに、紫陽花という漢字が当てられたのは和名抄成立以前からと思われます。

紫陽花の典拠は、中唐時代の詩人、白居易(772-846)の詩文集「白氏文集」中の詩「紫陽花」

です。

日本では、白氏文集は、白居易の生存中にすでに渡来したとも言われ、しかも貴族階級に広く愛読されたので「紫陽花」という詩も6世紀後半には知られていたものと考えられます。

「紫陽花」という詩はつぎのようなものです。

「紫陽花 白居易」

何年植向仙壇上 何れの年にか仙壇(仙境)のほとりに植えたる、

早晩移栽到梵家 いつか移しうえて梵家(寺)に到れる。

雖在人間人不識 人間に在りといえども人識らず、

与君名作紫陽花 君のために名づけて紫陽花となす。

この詩には、概要つぎのような前書きがあります。

「招賢寺に花を着けた1本の木があるが、その木の名を誰も知らない。花は、色が紫で、香りが良く、大変に美しくまさに仙境にふさわしい花である。そこでこの花を紫陽花と名づけた。」

中国(唐)文化に憧れていた平安人にとっては、この「紫陽花」がまさにあじさいであると思ひ込んだとしても不思議ではない。

ただ、白居易が名づけた花が、本当にあじさいであったかは疑問視されている。あじさいは、1本の木と表現するにはふさわしくないようなブッシュ状の生え方をするし、香りもほとんどない。したがって、あじさいではなく、あじさい同様、中国にとっては外来植物であったライラックではなかったかという人もいる。(1999:6-17朝日新聞、天声人語)

「紫陽花」という名が、中国においては、大詩人白居易の命名にもかかわらず広まらなかったのは何故だろうか。詩そのものがご挨拶程度の詩で魅力に乏しく、人口に膾炙しなかったためかもしれない。

それに比べ、日本では完全に定着し、紫陽花をあじさいと読めない人はいないと思われるほどである。白居易も1200年前の昔、日本で紫陽花の文字がこれほど一般化することなど、ましてや“紫陽花俱樂部”の名称に採用されるなど想像だにできなかったろうし、天国で大いに喜んでいいることだろう。

紫陽花考(その3)

あじさいの語源(その3) : 紫陽花の学名について

紫陽花には、学名として、古くは、ガクアジサイに *Hydrangea Macrophylla*、アジサイに *Hydrangea Macrophylla* var. *otaksa* という名が与えられていました。このアジサイの学名には、かのシーボルト(Philipp Franz von Siebold: 1796-1866)の愛の物語が秘められています。それは *otaksa* という種小名に込められています。Otaksaは、彼の日本人妻の名、楠本滝、通称“お滝さん”に由来するというのです。薔薇や蘭などの園芸品種

の愛称に女性の名前を付ける例は普通に見られますが、お堅い学名に自分の愛する者の名を潜ませるなどほとんどなく、ユーモアセンスのある人間性を偲ばせてくれます。

学名の語源について、少し説明したいと思います。

*Hydrangea*は、属名で“アジサイ属”(ゆきのした科)を意味します。*Hydr*は、語源がギリシヤ語で“水”を意味し、*angea*は、同じくギリシヤ語源で“容器”を意味するとのことです。この属名の由来は、紫陽花が梅雨時分に咲くので、梅雨↓水↓*Hydr*にあるのではないかと連想したくなりますが、どうもそうではなくて、アジサイ属のさく果(ラグビ-ボール形で先端が裂けた果実)が“水瓶”に似ているからというところにあるらしい。紫陽花では、さく果は小さくて、それと認めることは困難です。

*Macrophylla*は、種小名で、同様にギリシヤ語源で、*Macro*は“大きい”を、*phylla*は“葉”を意味します。アジサイの学名の中の *var.* は、*varietas*の略で“変種”を意味します。

したがって、アジサイの学名は、アジサイがガクアジサイから派生した変種であることを意味しています。

Hydrangea “アジサイ属”で比較的身近に見ることができるものには、タマアジサイ(右画像：蕾と花)、ツルアジサイ、ノリウツギ(別名サビタ)などがあります。

タマアジサイは、開花時期がアジサイより大分遅い。氷取沢市民の森の沢の流れ沿いでも、暑さが増す頃涼やかな青い花を咲かせています。

ツルアジサイは、梅雨のころ、白い花を着けます。梅雨の晴れ間の大山に登ると大木に絡み付いて白い花を咲かせたツルアジサイを遠望することができます。緑一色の山中に白い巨大な石筍が出現したような奇観を呈しています。

ノリウツギは、夏の頃、白い花を着けます。その昔、トロロアオイの根と同様に木皮から、和紙を漉く時の糊剤を採りました。それがこの木の名の由来です。以前、この花が阿蘇山のいたるところに咲いているのを見たことはありませんが、横浜近辺ではまだ見たことがありません。

シーボルトについてもちょっと触れたいと思います(この項は、「花の文化史、春山行夫著」による)。なお、シーボルトについては、「せいちゃんのホームページ」に詳しく紹介されていますので、簡単に紹介します。

シーボルトは、幕末、オランダ東インド会社所属の医者として来日したドイツ人です。優れた眼科医として日本人の治療に尽力し、名声と信用を得て、鎖国下の日本にあっても別格の処遇を受け、かなり自由な行動がとれました。そのような比較的自由な行動の中にあって、鳴滝塾で日本人に医学教育をほどこすとともに、日本そのものに多大な興味を抱き、就中、植物には特に関心を持ち、採集、分類、命名し、ヨーロッパへ紹介しました。

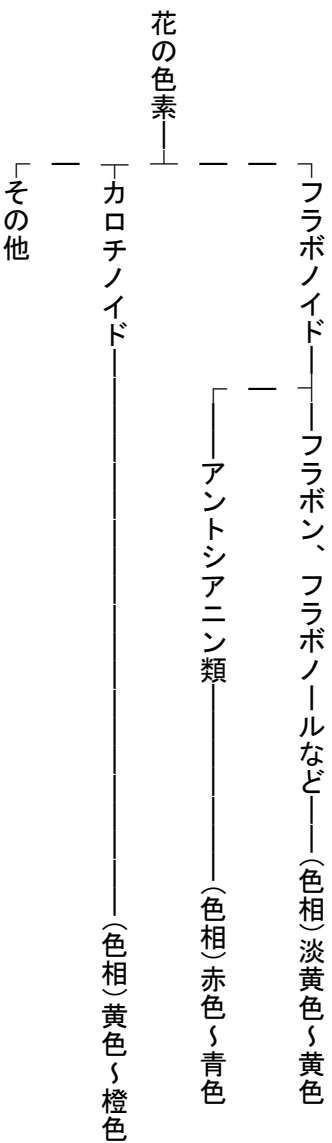
そんな中に紫陽花もあったわけですが、これ以前に英国には中国から実物がもたらされていきました。シーボルトの日本の植物への関心は純粹に学術的なものではなく、園芸家的な興味からであったといわれています。西欧人には大航海時代以降、プラントハンティ

ングの伝統があり、その表われではないかと思われます。シーボルト事件で国外追放となり、オランダに戻り「日本誌」、「日本植物誌」などを著わしました。日蘭修好通商条約が締結された後、再度来日しています。

紫陽花考（その4）

紫陽花の花の色について

いよいよ花の季節、色とりどりの花々が咲き競う季節です。紫陽花の花の色を説明する前に、まず、これらの花々の色の元、色素についてちょっと述べてみたいと思います。自然界の花の色素は、その化学構造から、次のように分類できますが、ほとんどの花の色は、フラボノイドかカロチノイドに属すようです。



この分類は、化学構造に基づくものですが、フラボノイドの場合、化学構造は似ているとはいえ、フラボン、フラボノールなどとアントシアニン類とはその性質がかなり異なります。

色相が異なるだけでなく、酸、アルカリに対する挙動がかなり異なります。フラボン、フラボノールなどは比較的安定であるのに対してアントシアニン類は H^+ （酸性度）や共存する他の物質の影響を受けて、色相が赤色から青色の範囲で多彩に変化します。

紫陽花の場合、花の色が赤色から青色に変化したり、西洋紫陽花のように赤色のものもあります。色は違っても、色素は皆同一で、ある種のアントシアニン系色素一種だけといわれています。その、ある種のアントシアニン系色素が、ある種の酸とアルミニウムの相互作用（錯体を形成する）を受けて色の変化を呈するといわれています。このアントシアニン、酸、アルミニウムの3者の比率の微妙な変化が紫陽花の色に反映しているようです。このアントシアニンは、酸が存在するだけでは赤色で、アルミニウムの存在が色相の変化に寄与し、この比率が増すにつれて青色が増していくようです。

話は紫陽花から離れますが、近年、ポリフェノールなるものの健康効果（癌予防、老化防止など）がとみに注目されています。人間の体内では、過剰の活性酸素は、細胞を傷つけるので癌の原因になったり、老化を促進したりすると考えられています。ポリフェノールは、化学的に活性酸素と反応しやすく、活性酸素を取り除く効果が期待されるわけ

す。

ポリフェノールは、フラボノイドの仲間で、1種類の化合物を意味するのではなく、いろいろな化合物が含まれています。ワインのポリフェノールは、アントシアニン類とフラボノイドであるタンニン類であり、お茶のポリフェノールであるカテキンもタンニンの一種です。そんなわけで、将来いずれの日にか、紫陽花のポリフェノールから癌予防薬やら老化防止薬やらが発見されないと限りません。

紫陽花考（その5／終）

紫陽花をテーマにした文芸作品

かわら版の題名を紫陽花に関する文芸作品としたものの、思い当たる作品などひとつもないので図書館を当たってみることにしました。文芸作品のみならず、絵画などもと考えて調べ始めたのですがこれがまた簡単ではなく、腰を落ち着けて取り組まないためなことが分かり途中であきらめ、インターネットに頼ることにしました。

まず、手始めに文芸作品を、神奈川県立近代文学館のホームページの蔵書検索で、キーワード「紫陽花」、「アジサイ」、「あじさい」、「あぢさゐ」で調べてみました。重複している書誌をを除いて、それぞれ33件、6件、12件、9件の合計50件もの多数の近代文学書誌が検出されます。これらの書誌名をみると、小説、詩歌集、随筆集などが含まれるようですが、どれも過去に読んだものではなくいくつか読んでみたいと思えますが・・・永井荷風の「あぢさゐ」、吉行淳之介の「紫陽花」などなら紫陽花の情緒がくみ取れるかもしれません。

絵画に関しては、Yahoo-Japanで「紫陽花 絵画」で検索すると件名としては相当数検出されますが、古今東西の名画を紹介するような手はありませんでした（著作権への配慮?）。

インターネットから離れて身近な資料を調べてみると、日本経済新聞(2000年4月12日)文化面にアジサイ研究家山本武臣という人の随筆が掲載されています。その中で、古来、紫陽花は美しい花の割には冷遇されており、日本的な花として認知されるようになったのは、全国各地に紫陽花寺が登場した戦後のことであると嘆いています。したがって、和歌をみても、古く江戸期以前では万葉集に二首、平安期に六首、鎌倉期に十五首、室町期に五首ほどがあるのみとのことです。

万葉集の一首「紫陽花の 八重咲く如く弥(や)つ代にを 居ませ我が背子 見つつ偲ばむ(橋諸兄)」は、文字通り読むと相聞歌のようにも思えますが、同氏著の単行本「アジサイの話」によると、実態はそうではなく、藤原氏との政争の中で、橋氏がその同志の繁栄を願って詠んだもののように背景には相当生臭い政治情勢が絡んでいるようです。

また、この和歌は別の問題を提起しています。すなわち、万葉の時代の紫陽花は、「カクアジサイ」であるというのが定説のようですが、「八重咲く」という表現を根拠に、当時

既に現在の「アジサイ」があったとする主張もあって定説に若干の混乱を生じているようです。

紫陽花は、花の風情からみて、川柳にはなじまないと思いましたが、念のためインターネットで検索してみました。思惑に反し結構詠まれてるものです。その中の一句に、「クリックし 紫陽花満ちて 結果よし」というのがありました。え？ 相澤さんは川柳もお詠みになるのかと、作者名を確認したところ、「Noboru Kado」となっておりました。どうも別人の方ですので、句の方をよくよく確認したところ、「クリックし」ではなく、「クリニック」でした。病院での検査結果が良かったので紫陽花の花のように晴れ晴れとした気分になったと詠んだものでした。一文字二文字の違いで全く違った内容になってしまうものですね。

(一枚の写真は、本文とは関係ありません。下の写真は、白い花を沢山着けた、大山のツルアジサイで、モミの木によじ登って6〜7メートルの高さになってます。)

あじさいのいがいな謎？

江戸時代には、移り気、心変わり、裏切りの象徴として忌み嫌われていたことを知っていますか？

公園やお寺で紫陽花の名所が増えて来ましたが、これはほとんど紫陽花のイメージが変わってきた戦後に植樹された物だそうです。

もともと紫陽花は、日本に自生していた萼紫陽花(ガクアジサイ)が母種で後に欧州に渡り品種改良され、逆輸入され広く一般に広まったものです。戦後植樹された名所の紫陽花もほとんどが、この逆輸入の品種です。欧州ではアルカリ土壌が多いので日本とは逆にピンクの物が主流だそうです。

あじさいの語源は、「あじさい」と言っ言葉が変化して生まれたもので、「あじ」は「あつ」で集まるの意、「さい」は「さあい」(真藍)からきた言葉で、青い花が集まって咲くと言っ意味の言葉です。日本は酸性土壌がほとんどですので、自生種は、ほとんど青い花だったはず。移り気、心変わりのイメージとは、裏腹にあじさいの語源は青い花と決めているのは、これまた意外ですねえ。

でも、この「紫陽花」という漢字でどうして「あじさい」と読むのでしょうか？

どう考えてもこれは、完全に当て字としか考えられませんよねえ。物の本によると平安時代に唐の白楽天の詩にあった「紫陽花」という花名を、強引にも日本のあじさいにあててしまったところから生まれたそうです。誰がそうしてしまったのかはわかりませんが、よっぽど「紫陽花」の字からくるイメージが気に入ったのでしょね。しかも、もともとの中国の「紫陽花」という花がどんな花かについては、未だによくわからないようです。しかし、中国でもあじさいは、咲いています。

こちらは、「八仙花」と呼ばれているそうです

